

外国人散在地域での「日本語指導ワークショップ」の試み

當房 詠子 (梅光学院大学)

平田 歩 (梅光学院大学)

1. 外国人散在地域下関市での支援の現況

下関市は外国人散在地域であり、外国につながるのある児童生徒の在籍もまだ少なく、2016年度(平成28年度)現在、日本語指導員は市内に1名のみである。日本語指導の必要な児童生徒は当該校に1~2名とはいえ、担任だけで指導に当たるのは難しく、日本語指導員の配置されない学校では、資格のある日本語教師がボランティアで数名の児童生徒の自宅をまわり、指導に当たっている状況である。配置されている日本語指導員も、それまでは日本語指導の経験はなく、学校や市教育委員会も日本語指導のノウハウや経験がなかったため、最初は他県の資料を参考にしながらの手探りの指導だったという。日本語指導員の配置されない学校では、地域のボランティアが活用されることもあるが、日本語指導の理解や経験がない場合が多く、効率的な指導が行われているとは言い難い。

2. 実践現場の課題と目標

今後増えるとみられる外国につながるのある児童生徒の日本語支援の充実を図るためには、学校現場での日本語教育への理解が必要となる。しかし、実際の現場では「子どもは上達が速いから」という言葉で、適切な指導や支援がなされないまま放置されている場合が多く、そういった子どもたちの不安や困難な状況は見過ごされてしまう。今、同市では子どもの日本語指導のできる人材は少なく、理解を広める対策が求められる。各学校への日本語指導員の増員の実現は難しいが、子どもの日本語教育の重要性への理解が広まれば、地域での支援も可能になる。そこで、小中学校教員や地域のボランティアに関心のある人を対象に、外国人の児童生徒やその保護者との接し方、日本語の指導法について考える場を持つことで子どもの日本語指導への理解を図るための「日本語指導ワークショップ」を試みた。

3. 実践「日本語指導ワークショップ」

3.1 実践の方法

「日本語指導ワークショップ」は、市内で唯一の日本語教員養成課程のある大学で行われ、教員養成を担当する教員らが計画し、募集には市教育委員会にも協力を求めたうえで、実施した。学校教員が参加しやすいよう、夏休みを利用し、8月前半の3日間と後半2日間の合わせた5日間で実施した。同時に児童生徒対象の「夏休み日本語教室」を並行し、日本語教育を専門とする大学教員や学生ボランティアが子どもたちの日本語指導や夏休みの宿題を手伝うということも初めての試みとして行い、その実際の指導の様子を見学できるようにもした。

参加者は小中学校の教員4名を含む10名で、教員以外は何らかの形で海外での経験があったり外国人あるいは子どもとの関わりを持っていたりしていた。全員が全日程を受けたわけではなかったが、内容によっては子どもたちの活動に関わって体験をしてもらい、最終日の終了後にアン

ケートで感想を求めた。

3.2 ワークショップの内容

実施の際の一日の活動の流れと内容は次の通りである。(表1、表2)「夏休み日本語教室」への児童生徒の参加は3名と少なかったが、その分、細かな指導を行うことができた。

表1. 一日の活動の流れ

	児童生徒対象	大人対象
9:00 ~12:00	「夏休み日本語教室」 ・日本語の学習(教員2名が指導) ・夏休みの宿題(学生ボランティア延べ8名協力)	左「教室」の自由見学
13:00 ~15:00	「夏休み日本語教室」 日本の遊び、読み聞かせ、図画などの自由課題 (学生ボランティア延べ8名協力)	「日本語指導ワークショップ」一部、「教室」の活動に参加

表2. 「日本語指導ワークショップ」の内容と参加者

	内容	参加者の様子や反応
第1回	「受け入れと初期指導」:受け入れ校が抱える課題と受け入れ初期に必要なことを確認した。	要望を伝えるための日本語の指導、学校行事や習慣への理解、給食の指導など、必要なことに気づいた。
第2回	「やさしい日本語とは」:児童らに「ももたろう」の話をやさしく言い直しながら読み聞かせを实践。児童らはそれぞれ聞いた話から絵日記や紙芝居を作成した。	「鬼退治」を「鬼とたたかう」と直したことが新鮮だったとの感想があった。
第3回	「学習に必要な日本語指導」:児童の宿題の指導に参加し、算数のたし算ひき算に使われる言葉などについて考えてもらった。	「やってくると」が足し算になり、「食べると」が引き算になるという気づきなどがあった。
第4回	「国語教育と日本語教育」:教科を学ぶ際の学習言語の特徴について示し、日常生活ではあまり使われない語彙などを確認した。	通常のクラスで他の日本人の子どもたちと一緒に同じことを学ぶことがどれだけ大変なことかに気づいた。
第5回	「効果的な指導法を考える」:子どものレベルを設定しどんな指導がよいか考えた。	「取り出し」による指導も必要であることを認識した。

4. 成果と考察

子どもたちにやさしい日本語を使って話すなど、普段使っている日本語を言い換える難しさを体験し、何が「やさしい」のかに気づいたことなど、効果的に体験できた内容が好評であった。アンケートでは「少し難しかった」という声もあり、興味を持つだけではなくきちんとした日本語や日本語教育についての「学び」が必要であることがわかった。また「定期的に指導者同士話せる場がほしい」という声もあり、学ぶ機会を作る必要が認められたため、半年後の2017年2月には、このときの参加者による「下関子どもの日本語教育支援研究会」の発足に至った。活動を元に今後ボランティアや指導者が増えれば、市内の学校への日本語支援も可能になると考える。